

町営斎場建替事業について 余市町長 齊藤 啓輔

3年前に供用開始されているはずであった新斎場は、工事が中断し未だに解決の目処が立っていません。その間にもどんどん老朽化と不具合が進行してきて、もう「建て替え待ったなし！」の状態です。後に述べますが、斎場へのアクセス道路が作れなくなったことから、現在の梅川から移転し、建て替えるための調査費用を、昨年議会で議決しました。その後コンサルタントが調査を行い、議会に対し建設適地を都市公園予定地（黒川町）と旧栄小学校（栄町）の2カ所にするとの結果を示したうえで、私の判断が足りないとお叱りを受けました。私もその点について反省、ご批判を真摯に受け止め、町営斎場建替事業適地検討委員会を立ち上げ、町民の皆さんを巻き込んで、現場の視察も含め5回にわたり議論をしていただき、先日報告書をいただきました。報告書については、その内容は別ページに掲載されていますが、新斎場の建て替えは早期に行うべきである、適地を現計画地（梅川）と都市公園予定地に絞ったが、これらの候補地には様々な課題があるとの意見でした。

●建て替え議論の出発点は、斎場へのアクセス道路

斎場建て替え議論の出発点は、斎場のアクセス道路でした。梅川の現斎場は、建設から半世紀近くが経過し、老朽化と不具合が頻発しています。加えて斎場までのアクセス道路は勾配が急なため、冬場は車やバスが登れなくなり、棺を担いで斎場に向かうという事態も生じています。大切な人を亡くされたばかりのご遺族のことを思うと、早急に対処すべき課題でした。しかし、平成30年の着工直後から、敷地の造成中に法面が崩壊し、湧水による地滑りが発生します。さらに斎場の上部に位置する墓地の地面が傾くなどのトラブルが相次ぎ、工事を中断せざるを得なくなりました。課題のアクセス道路も、地滑り対策工事をした結果、計画していた進入路を整備するための敷地が確保できなくなり、急勾配の道路のままになってしまうことから、整備が不可能となりました。建設地に地滑り対策工事をしたことで、現段階では地滑り解析による数字上の安全は確保されているものの、地形が丘陵地であることから、将来的な地盤の安全性は担保できない状態です。また、町民の皆さまの中には、「なぜ梅川がダメなのか。技術的には可能では」との疑問を持たれる方もいらっしゃいます。ただ、当初計画した建物の建築面積を確保するためには、敷地の拡張に新たな地滑り対策が必要となり、その事業費としてさらに2～3億円がかかるとの試算があります。その他の地盤整備も含めると、それ以上の事業費がかかり、建物の着工もすぐにはできません。供用開始時期が見通せないことを考慮すると、梅川での建て替えは限りなく不可能であるという結論を出さざるを得ません。

●議会への手続きを経て建て替え場所は絞り込まれた

梅川は安全なアクセス道路の整備と斎場建設に必要な敷地面積の確保が望めないことから、そこでの建設は断念し、新たな町営斎場の適地選定をするための予算を議会に議決をいただき、建設地を精査することとしました。調査結果から候補地を旧栄小学校と都市公園予定地に絞り込み、最終的には、面積を確保できる平坦な町有地で迅速に工事が開始できること、国道からのアクセスが良く冬季やインフラ整備の負担が軽減できること、人口減少下での将来的な広域的利用の可能性といった迅速性と将来性を勘案し、私の判断で都市公園予定地を第一候補地としました。

本来は移転候補地とした地域の皆様に事前に十分な説明を行うべきところでしたが、老朽化の著しい町営斎場の建て替えを早急に進めなければならないことを最優先課題として、皆様にお知らせしたところです。しかし、住民説明会では、住民とのコミュニケーションが不足しているのご指摘を受けたことを真摯に受け止め、冒頭でも述べたとおり、町営斎場建替事業適地検討委員会を設置し、報告書を頂いたところです。

●お金と期間の話

新斎場の建て替えのため、これまでに約5億円が使われていますが、なんら成果はありません。いつ壊れてもおかしくない現斎場の維持管理の費用は年間約2,000万円です。それに加えて、既に発注済みの火葬炉はもう3年も倉庫で保管されており、その保管料は年間約300万円かかり続けるとともに、すでに年月を経過し、錆もでてきています。

火葬中に火が止まってしまう不具合すら発生する現斎場の管理コストにはこのくらいの金額が毎年かかってきます。新斎場の建て替えを早急に進めるためには、来年度予算に調査費用を計上しなければなりません。それが無事に通過し最短で完成させた場合、令和8年度に完成し、令和9年度から供用が開始されるスケジュールです。もし調査を行えない場合は、さらにスケジュールが遅れることとなります。

ところで、町の財政は私の就任後、財政技術などで經常収支比率^(※1)を15%ほど下げることになりましたが、決して予算を許さない状況です。

特に扶助費^(※2)については、10年前から2倍、20年前からは5倍になっています。

今後の人口減少で町のお財布が小さくなる中で、今まさに手を打たないと町は潰れてしまうという危機感を持っています。

※1 自由に使えるお金の割合。100%に近いと自由になるお金がないことを示す。

※2 高齢者や生活に困っている方などを社会で支えるお金。

●未来の余市町を見据え判断を

町営斎場に限らず、老朽化した公共施設の再編整備は余市町にとって重要な課題です。町内の公共施設は、老朽化が非常に進んでいて、このまま人口減少と高齢化が進むと、町民生活を支える行政サービスの提供が将来困難となる状況になりかねません。そのためにも町内に点在する公共施設の在り方を含め未来につなげるまちづくりをしなければならないと考えています。町営斎場に関しては年間300件の利用があり、今後数年は高齢化の進行などにより利用件数の増加も見込まれますが、その後の人口減少を考えると、広域的な利用の促進も考慮する必要があります。また、施設を運営する人材も減る、仮に郊外へ斎場を建設した場合は冬季の除雪や遠距離移動に伴う利用者の負担、メンテナンス費用が増えるなど、将来へ大きな負担を残すこととなります。

この20年間、余市町は町営斎場の建て替えについて先延ばしにしてきたことで、町民の皆さんにご不便をかけることになりました。ただ、現実問題として工事中断から数年が経過し、現施設は老朽化によりいつ壊れてもおかしくないというのが現状です。全ての方が満足する回答を出すことは不可能だと思います。しかし、この問題は私が悪者になったとしても、将来を見据えた決定を下さなければならない事案であると考えており、都市公園予定地が適地であると考えています。